

季刊誌「Arune」13号（September 2005）の掲載原稿の初稿

大橋 歩さんあてに書いた 初稿

歩さん、

しばらくお目にかかっていませんが、お元気ですか。東京で最後お会いしたのは、私が制作の場を西海岸からニューヨークへ移した直後におきた世界貿易センターの同時多発テロ事件以前ですから、もう何年も前のことになりますね。事件当時、私のアトリエは貿易センタービルの近くにあって、空気の中に死の臭いを感じながら、毎日アトリエへ通ったことを思い出します。今までの価値観が全て変わり、2001年9月11日からが本当の意味で21世紀になったと言われた混沌とした情勢でした。そんな中、アーティストとして一体自分に何ができるのかと、途方に暮れた末に私の手の中から生まれた作品は、人間が生きていく上で不可欠なく塩>と言う素材でできた生命の<かたち>でした。（＊生命には、いのちとルビを打つ。）

そのころ、偶然にもバングラデッシュ、エジプトと、イスラム圏での展覧会に参加する機会に恵まれました。特にバングラデッシュ・アジア・ビエンナーレの期間中には、インドとパキスタン間の緊張が高まり、私の滞在中に英中の首相が訪れるなど、政治的な変動のまっただ中での展覧会となりました。また、翌年には、米軍のイラク攻撃から10日目、イラクの南に位置するアラブ首長国連邦のシャルジャ・ビエンナーレに参加するために、初めてアラビア半島へ向かいました。展覧会の開催はイラク戦争の前から決定していましたが、当然のことながら、安全性を懸念して辞退したアーティストも多く、最終的にはヨーロッパとアジア及びアラブ諸国の現代美術家が大半をしめる国際展となりました。シャルジャは、アラブ首長国連邦の中で三番目に大きな首長国で、ドバイから10キロ足らずの場所にあります。第二次世界大戦が勃発した折に、イギリスがこの地に基地を建設したため、知識階級の人は皆英語を話します。私が参加したシャルジャ・ビエンナーレは、イギリスのロイヤルアカデミーへ留学した弱冠23歳のシャルジャ首長国王の娘が初めて総合ディレクターとして企画したもので、<新しい21世紀の国際展>と謳われた、現代美術展でした。現地での彼女は黒いベールを頭からすっぽり被り、オープニングの時も決して黒衣を外すことがなかったのだけれど、ニューヨークタイムズの新聞記事には「ヌードさえも見せられない国の政治情勢の中でどうやって毒の強い現代美術を展示できると思うの」と言う大胆な声明文とともに顔写真が出ていたのにはビックリしました。アラブで合ったときにはベールの合間から眼だけしか見えていなかったので、美しいモデルの様なその写真を見て、この人があのお姫さまだったとは想像もできませんでした。展覧会自体はとても質の高い現代美術展だったにもかかわらず、オープニング前日の首長国王の謁見の前に検閲が入り、ヌード写真やキスシーンの映像のある展示室には赤いテープが貼られる始末。中国人の若い女性アーティストは検閲された写真をアラブ博物館から取り寄せた宝物箱に入れて錠をかけ、箱の上に「この中には見せることができないモノが入っています」と書いてその宝箱を展示しました。

このシャルジャ・ビエンナーレにおいて私が発表した、<彼女が与えるもの>というタイトルのインスタレーションは、岩塩を固めて作った人間の脳の大きさ程のたまご200個を、塩で覆った床の上に並べ、その上に水の流れるビデオ映像を投影した作品。生命の<かたち>と先ほど書いた作品は、ダチョウの卵から実際に型取りした石膏型に、人間が一生の間に必要な摂取量の塩を入れて固めた、岩塩の<たまご>です。アートが人間の記憶を内包する役割があるならば、塩は人間の生存に不可欠な成分ですし、太古から食物を保存するために使われてきましたから、人間の意識や記憶を形成し蓄積する素材として、生命的モチーフにふさわしいと思ったのです。とはいっても、初めは塩を固める方法がなかなか見つからず、最終的には私の勤めるニューヨーク州立大学の、化学の教授の研究室で実験をさせてもらい、8週間の試行錯誤の末にやっと<かたち>にすることができました。

実は、私の作品もアラブ入りする前から「卑猥な素材を使用している」とクレームをつけられていたので検閲を覚悟していました。<卑猥>と言われた理由は、塩のたまごを作る際に女性のストッキングを使用したことと、塩のたまごにオトコとオンナと言う<ジエンダー>を与えたことです。オンナのたまごは、岩塩をストッキングに詰めて固めた、一見エロティックなとても個性的なたまご。オトコのたまごは一胆ストッキングに詰めて固めたたまごを、ストッキングから取り出した、クリスタルのようなマチエールの無垢の岩塩の固まり。女性のストッキングを使ったのは、イスラム教国での展覧会ということで、ベールの下に隠されたイスラム女性のセクシュアリティとジエンダー、つまり社会的、文化的役割としての性という問題を、現地のアラブの女性たちと考える機会をつくりたかったから。ちなみに戒律の厳しい中東諸国でもアラブ首長王国は比較的開放的で、女性は一般に美しい下着を身につけることに身だしなみ以上の労力とお金をかけるんだそうです。ドバイにはサロンなみの料金（といつても150円くらい）の女性用のパウダールームがショッピングモール内にあって、そこで女性は彼女たちだけに限られた場での社交を楽しむんですって。信じられないことに、ここでは授乳もできるそうで、日本にある授乳室付きのデパートの休憩室と比べものにならないほど豪華だそうですよ。

ところで、オトコとオンナのたまご百個ずつを、ひとつずつ、こつこつと作り、アラブへ送り出したのがイラク戦争の直前。すでに空爆は行われていたし、当然のことながら、ニューヨークから巨大なコンテナでドバイへ空輸された正体不明の塩のたまごはバイオテクノロジーを駆使してつくった爆弾かなにかと疑われて税関でひっかかり、展示会場の美術館で搬入されたのは展覧会オープンの二日前の夜中でした。もし、作品が展覧会に間に合わなかつた場合、この<たまご>たちを、米軍基地のあるドバイからイラクへ送り、イラクの人たちの<生存の糧>にしてもらおうと、私は、密かに計画していました。なぜなら、人間と家畜は、塩と水さえあれば最悪の状況の中でも生きながらえることができるから。

こうして、戦争のまっただ中、アーテストとして、イスラム教国の展覧会に参加する意味について考え続けてきました。私にとってこの展覧会で最も素晴らしいことは、現地の若い女性たちと交流でき、彼女たちが参加することによって、イスラム女性の声が作品の最も重要な要素となって展開したことです。私は、シャルジャ大学美術学科の最初の卒業生となる若い女性たちに現地で協力を求めました。彼女たちに展覧会開催の前日早朝に美術館に集まってもらい、オンナのたまごだけを選んで、夢や希望や公表できない欲望といった私的な想いをそれぞれのたまごに無記名で書いてもらったのです。彼女たちは、「この体験は、アートというメディアを通して、個としての自分を初めて解放する触発剤になった」と、語ってくれました。そのアラビア語が書かれたオンナのたまごを、オトコのたまごと一緒にし、それらをアラビア海から集めた1トンの塩で覆われた床の上に敷きつめ、さらに、その上に流れる水（滝）のビデオ映像を投影したのです。滝の水が白く光り輝く塩の上をえんえんと流れることにより、暗い闇の様な空間に生命が吹き込まれた様になりました。こうして、イスラムの女性たちによって完成されたこの作品は、戦争に対する怒りや平和への祈り、また揺れ動く心のメタファー、すなわちイスラム社会の中で言動を厳しく規制されている思春期の女性たちの表象となりました。

「運命」という、美しい名前を授かった女学生がたまごを抱きながら、この塩のたまごはイスラム女性の涙の結晶のようだと言ったのが忘れられません。私にとって生命の風景をたまごのかたちや塩に託して表象することは、国や人種や宗教や思想の違いを問わずに、生命の究極のはかなさと強靭さを新たに呼び起こすことなのです。（\*運命という文字にウファというルビをうつ）

ところで、アラブの悲劇は石油の取り合いによって始まったといわれますが、皮肉なのは、欧米の列強が石油を求めて進出するまで、当のアラブにとって石油はなんと、「使い道のない黒い水」程度の価値しかなかったそうです。今や米軍がすべてを破壊したイラクの首都バクダットは、紀元前六世紀に栄えたメソポタ

ミア文明発祥の地ですけれど、その時代にすでに石油が古道路にはアスファルトが敷かれていたのをご存知ですか。このような全人類の文化遺産を抱えていたアラブの博物館、官殿、病院、学校、商店などのあらゆる施設が略奪と破壊に合うなかで、英米軍が唯一「守った」のが、石油省の建物だったと、ニューヨーク州立大学で古代美術史を教えるイラク人の同僚は、自分の国に調査のために戻ったものの、落胆のあまり声も出なかったそうです。

人間は世界中どこであろうと芸術を通して、ピカソの「ゲルニカ」の様に戦争の混乱や人間存在の複雑性や時代のカタストロフィーを表現してきました。しかし、我々が現在繰り返し「見せられる」戦争は報道映像がほとんどです。私がアラブ首長王国に滞在していた時、日中は各々の国のどのアーティストも、展覧会の準備にかかりきりでしたが、夜は国籍も人種も宗教も思想も異なるアーティストたちがホテルの一室に集まり、テレビに釘付けになっていました。私がアメリカで「観ていた」イラク戦争は、英米軍がメディアを使って戦争アワーという特別「テレビ番組」を、今はやりのリアリティショーのごとく構成し、戦争を二十一世紀の一大スペクタクルとして演出し、リアルタイムで報道したものでした。それに対し、私がアラブ首長王国のホテルで見たのは中東のCNNといわれるアルジャジーラという対抗メディアの報道した別のアリティー。それは、欧米の映画の様に演出された「イラクの民を解放する」というストーリーとは全く異なった、とても正視に堪えられない、生き地獄の様な一般市民の泣き叫ぶ声とカタストロフィーの映像でした。サダメ・フセインの銅像が倒された夜—暑い中東の夜の空気が一瞬、凍りついたのを今でも覚えています。ホテルという、無国籍、治外法権的な場でチャンネルを回して世界中の報道を観ていると、ニュースというのが結局、それぞれの国のメディアの戦略と脚本のもとに演出されていることがわかります。

偶然にも先日、「イメージという戦場—戦争という表象の政治学」という、イメージとジェンダー研究会のシンポジウムに参加した美術史家の友人から「『戦争』をめぐる人々の意識と記憶は表象され語られ直すことによって集合的記憶を形成し「歴史」を創る。表象はメディアんを通して『われわれ』を戦争へ駆り立てる。表象なしに戦争遂行はあり得ず、戦争は同時に『表象の戦争』である。』という、この討論会の声明文が送られてきました。これを読んではっと思ったのは、私が高校時代に考古学に興味があった頃読んだ、ギリシャのホメロスの作といわれるトロイ戦争を描いた「イーリアス」。人が最初に手にした道具が武器だとしたら、文明最古で最大な英雄叙事詩が戦争を描写した文学というのはオドロキ。そういうれば、日本の古典文学にも源平の戦いを描いた「平家物語」がありますね。

展覧会から2年たち、いまだにイラクやイスラエルで無闇な殺戮が続く中、戦争には決して「偶然」ということはなく、戦争の事実も報道もすべて「任意」のものであるということをつくづくと感じます。久しぶりのお手紙なので長くなりましたが。ニューヨークでの制作中のアトリエの写真とアラブ首長王国の展覧会の写真を送りますね。

ではまた、

長澤伸穂